

## 第三〇章 義の四つの面

神の恵みの栄光の一つは、しみ一つない婚礼の衣装にたとえられた完全な義が備えられており、信じるものすべてに価なしに与えられていることである。ここに義の四つの面を考察してみる。

### I 神は義である

神の義は変わることがないし、変えることができない（ロマ 3：25、26）

#### 1 神はその本質において義である

神にとってたとえわずかであっても、義から逸脱することは不可能である。罪に対していかなる許容も示されない。生まれつき、そして実際の行いの上でも罪人であるゆえに、神のさばきが人の上に下り、断罪されている。

#### 2 神はそのなしたもうことにおいて義である

神は罪を軽視したり、ただ寛大に許したりすることはできない。福音の勝利は、無限の義が罪人に要求するさばきのすべてが、神の与えられた小羊の身代わりによって負われたという事実と信じる者すべてにとって十分であるという事実にある。神は、この計画によって、その義を損なう事なく罪人を救い、愛を全うすることができた。

そして自分自身には全く功績のない罪人が、すべての呪いから逃れることができるのである。（ヨハネ 3：18、5：24、ロマ 8：1、I コリ 11：32）

### II 人間のひとりよがり

神の義に対して、人間の義（ロマ 10：3）は「不潔な着物」（イザヤ 64：6）のようである。人間の罪深い状態はロマ 3：9-18にもみられる。人間は家族、社会、国家のために厳しい規準を立ててきた。しかし、それらは神の前にさばかれるべき根拠の一部とはならない。社会から罪を宣告されたものだけが失われるのではなく、神の不変の義によって罪に定められたものが失われるのである。したがって、いかなる個人にも神の備え以外に望みはないのである。

### III 神の転嫁された義

#### 1 転嫁の事実

アダムの罪の全人類への転嫁（ロマ 5：12-21）は全人類の罪が十字架のキリストに転嫁されたという事実において展開される（II コリ 5：14、21、ヘブ 2：9、I ヨハ 2：2）。

そして、神の義は救われた者のうえに転嫁される。それゆえ、救われた者は神の義とされたといわれる（I コリ 1：30、II コリ 5：21）。これは人間の功績を全く除外しているゆえに、人の善良さのゆえに増し加わることもないし、その邪悪さのゆえに減少するものでもない。

## 2 転嫁の結果

聖霊のバプテスマを通してキリストにあるという事実に基づいて、神の義が転嫁されていることの中にみられる。キリストとの生命的つながりを通して（I コリ 12：13、ヨハ 15：1、5）、キリストにある神の義が、わたしたちのうちに与えられている。

## 3 転嫁の実例

アダムへの皮の衣（創世 3：21） アブラハム（創世 15：6 他） 祭司（詩篇 132：9）  
信者の衣（黙示 19：8） ピレモン（ピレ 17、18）

## 4 転嫁の影響

転嫁によって信者の立場は永遠の立場に変えられるが、日常生活の状態は依然として完全からは遠い。

## 5 転嫁された義は義認の基盤である

神はキリストのうちにある者を、永遠に義と認めると宣言しておられる。それは、転嫁と同じように信仰により（ロマ 5：1）、恵みを通して与えられるもので（テト 3：4-7）、キリストの死と復活によって可能とされる（ロマ 3：24、4：25）。それは、永遠に不変である。

## IV 御霊によって与えられた義

御霊に満たされるとき、「御霊の実」（ガラ 5：22、23）としての義の行い（ロマ 8：4）を生み出し、御霊による奉仕の賜物を明らかに示す。「肉にしたがって歩まず、御霊に従って歩む」（ロマ 8：4）ときに成就される義である。